

世界の仲間から

インドで乳幼児の栄養不良改善に取り組む  
悩みは尽きないが貴重な経験

渋谷 朋子 (高55回)

インドからナマステ。現在、シニアプロジェクトオフィサーとしてインドジャイプールに駐在し、日本の外務省の支援で行っている「ラジャスターン州70村における5歳未満の子どもの栄養不良改善事業」のプロジェクト管理を行っています。「栄養不良」というと、食料へのアクセスがないという面が想像されますが、インドでは、母乳育児に関する知識、家庭内での母親の発言権、出生時の体重、貧困、宗教、カーストなど、様々な要因が複雑に絡み合っています。



渋谷さん(下の写真の左端)の母子支援活動でのひとコマ



たとえば、生後6か月になるまでは母乳のみを与え、7か月以降は離乳食とお乳で育てることが最も理想的です。しかしながら、ここインドの農村地域では、母乳育児に関する知識がないために6か月未満の乳児にお乳の代わりに水を与えたり、1歳を迎えるにお乳しか与えていないことが多く、子どもは栄養不良の

状態になりがちです。また、子どもが病院に入院することは家の不名誉、と考える人も多く、重度の栄養不良の子どもを病院に連れて行くのも一苦労です。女性は男性より立ち位置が低いため、男性へのご飯が優先され、女性が十分な量のご飯を食べられないジェンダーの問題もあります。そのような中、十分に学校に行けず、字を読むこともおぼつかない女性たちが、「新しいことを学ぶの楽しい！」と言ってトレーニングに積極的に参加している姿や、重度の栄養不良の子どもが回復した姿をみると、仕事のやりがいを感じます。子どもの頃から、紛争がなげ起こるのだから、英語で仕事をすることへのあこがれ、保健、文化、宗教に昔から興味があったことから(英語、社会とも決して成績は良くなかったですが!)、国際協力の仕事を志してきました。インドで仕事をする機会を頂いてきましたが、その中でもインドは、他の国と違い、人間関係、仕事のやり方、予想外の事態

に戸惑うことが多く、精神的タフさが求められる国だと思えます。この国で、未だ自分らしいマネジメントは確立できておらず、悩みは尽きません。ですが若いうちに、この強烈な印象を与える国で仕事をできることは、貴重な経験だと思っています。

今後、どのような跡地利用となり、どのようなまちづくりがされていくのか、一住民として、建築設計に関わる身として、大いに注目しています。また、大学百年の歴史資産を活かしたまちづくりができないかとの思いで、日々仮囲いが増え、いく箱崎キャンパスを寂しい思いで見ながら、「箱崎九大跡地ファン倶楽部」なども連携し、微力ながら活動をしています。と同時に、キャンパスの外側の街で、一部シャッター街化している箱崎商店街と街全体の賑

わいづくりのために、活動を展開しています。昨年で13回目となった「ハコフェス」というイベントの企画運営がその一つです。箱崎宮の放生会期間中(毎年9月12、18日)、各店舗と協力を

百周年の節目に向けて、福岡高校の校舎は改修工事が進み、その歴史に一層の厚みが加わっています。

一方、私の地元である箱崎は、いささか異なる様相です。福高生にもなじみが深い九州大学箱崎キャンパスは、百年の節目に伊都キャンパスへの移転が進み、大きな変化の時を迎えています。

**博多便り**  
百年の節目 / 変化する箱崎より  
斉藤 昌平(高47回)